

メディア・リテラシー教育再考

—ケータイと今日の日本の若者の食生活の事例から—

カナダ・サイモンフレーザー大学大学院コミュニケーション研究科修士課程
岩瀬正幸

はじめに

上記をタイトルとする本研究は、私が現在在籍するカナダ・サイモンフレーザー大学大学院コミュニケーション研究科で執筆中の修士論文の基盤となるものである。今回の「2008年度鈴木みどりメディア・リテラシー研究基金助成者発表会」では、本研究の途中経過を報告した。未完成である調査結果の考察と結論については、フォーラム当日時点で報告できるもののみを提供した。質疑応答では出席者からの貴重な質問をもとに有意義な意見交換ができた。

研究目的

本研究の目的は、学校と学校外の若者の世界との間に広がるギャップの架け橋となるメディア・リテラシー教育（メディアについて教えることと学ぶことのプロセス）のあり方の探求である。タイトルに「再考」と入れたのは、この二つの隔たりを再認識し後述する「新しいパラダイム」と呼ばれるアプローチを考慮したメディア・リテラシー教育のあり方を追究するためである。

背景と問題意識

私たちは「学校外の若者の世界」を今日の複雑なメディア環境と切り離して考えることはできない。若者を取り巻くメディア環境はこれまでの一方向の伝統的マス・メディアがインターネットと結び付いたより双方向的・参加型のメディア環境、いわゆる「融合文化（convergence culture）」

（Jenkins, 2008）である。それはまた「間テクスト性（intertextuality）」を支配的特徴とするあるメディア・テキストがあらゆるメディアを通し別のメディア・テキストや商品と結合し相乗効果により経営戦略を生み出す「メディア混合（media mixes）」（Ito, 2008）でもある。こうした環境のもと、若者は携帯電話などの新しいメディア・テクノロジーを利用し仲間と共有できる創作物を主体的に作り出し発信する。若者はもはや大人がアクセスできない特殊なメディア・テキストの知識や文化的能力を身につけた「メディア・リテラシー」を持つ者と理解され、企業の重要な隙間市場（niche market）となっている（バッキンガム, 2006, p. 40）。

「学校」におけるメディア・リテラシー教育はこのような若者の複雑なメディア環境との結び付きに積極的に関与していなければならない。しかしながら、もしそれが「道具主義」・「保護主義」・「テキスト主義」的アプローチをとれば、それは若者の「学校の外の生活」と対立してしまう。これらは例えば、コンピューターなどのメディアを既存の教科を教える手段のためだけに利用すること（道具主義）、メディアが不可避に有害でネガティブな影

響を及ぼすのに対し若者はその危険に常に曝され対抗できない受動的犠牲者と理解すること（保護主義）（Buckingham, 2006）、あるいは生徒のメディア経験が社会生活全体と密接に結びついているにもかかわらずその一部分にしか過ぎない断片的・非文脈的メディア・テキストを教育的テキストとして利用すること（テキスト主義）（Morgan, 1998）である。これらのアプローチの問題点は、上述の若者の複雑なメディア環境との結び付きを熟知しない指導者（教師など）があらかじめ用意した文化的、道徳的、あるいは政治的権威を家父長的に押し付けてしまうところにある（Buckingham, 2006, p. 48）。

「学校」と「学校外の若者の世界」の隔たりを縮める効果的な理論的枠組みとして本研究はD. バッキンガムの主張するメディア・リテラシー教育の「新しいパラダイム」を考慮する。それは「子ども中心の見方を取り、教師の教育的要請からではなく、若者がすでに持っているメディアについての知識や経験からはじめる」アプローチであり、その目標は若者が対話（ダイアログ）を通しメディア・テキストの「読み手」と「書き手」の両方として自らの活動を社会・文化・経済・政治の文脈でクリティカルに分析し振り返るプロセスである（バッキンガム, 2006, p. 21-22）。このアプローチは若者の「遊び」心のある方法で楽しみと感情を投入しながら主体的にメディア制作に取り組むこと、そして「模倣（imitation）」を通しパロディを生み出し支配的なきまり事をコミカルで面白可笑しくすることを含む（バッキンガム, 2006, p. 201;205）。このアプローチを考えるうえで更に付け加えたいのは、フランスの歴史家・思想家であるミシェル・ド・セルトーの「戦術（tactics）」という日常生活の実践である。それは弱者が特定の権力によって組織された空間・場所を巧妙に再定義し抵抗の手段として再利用することを指す（de Certeau, 1984, p. 29-42）。したがって、日常生活の中で若者は楽しみと感情を投入しながら主体的にメディア・テキストのクリティカルな「読み手」と「書き手」になることができる。

調査方法

本研究がおこなった調査は、この「新しいパラダイム」を考慮し、今日の日本の若者が慣れ親しんでいる携帯電話を利用し、どのように彼らが「読み手」と「書き手」の両方として社会・経済的文脈からメディアを分析・評価し、また自らの活動をクリティカルに振り返ることができるかの追究である。ここでいう「メディア」は次の二種類を含む：1) 若者によるメディア制作のための携帯電話；2) 近年私自身に関心のある今日の若者の食生活、特にマクドナルドに代表される若者の間で人気のファストフードを取り巻くメディア文化。後者は若者のメディア制作の評価・分析対象となる事例である。

ファストフードを具体的な事例とした理由は次の4点にまとめられる：1) 至る所にあり低価格なメニューを提供しているという点において所得のない高校生のニーズに合っていること；2) 若者をターゲットとしたファストフード企業の商業的戦略が目立つこと；3) ファストフードに対する批判を掲げた「スローフード」運動が台頭してきたこと；4) アメリカのドキュメンタリー映画「スーパーサイズ・ミー」（2006）に代表されるように近年ファストフードの健康への悪影響が指摘されるようになったこと。本研究が実施した調査は「私自身の関心」であるこの4点をもとにしたファストフードという事例

を、道具・保護・テキスト主義に陥らないあくまで若者が既に持っているメディア（携帯電話およびファストフードを取り巻くメディア文化）についての知識や経験からはじめた。

調査期間は2009年3月上旬～4月下旬。調査地域・場所は愛知県岡崎市の某高等学校（私自身の母校）。参加者は某高等学校2学年生徒8名（男女共に4名、私の元担任またこの8名の現担任を通じ募集）。調査では具体的に：1）参加者である高校生一人一人に携帯電話のカメラを利用し三つのテーマ（ファストフード、マクドナルド、彼らとマクドナルドとの関係）を表現するイメージを撮影してもらいメールで送信してもらい；2）学校内および学校外で私と高校生によるイメージについてのグループディスカッションに参加してもらった（調査期間中、合計4～5回のインタビューを実施）。

調査結果・分析

参加した高校生からは30枚以上のイメージが送られてきた。実際のイメージをここで公開し、また全てのイメージとグループインタビューの内容を分析することはできないが、彼ら自身が学校外で楽しみと感情を投入しながら主体的に撮影・送信したイメージは非常にユニークなものであった。例えば、イメージには明らかに彼らがメディアの「間テキスト性」を理解し賢いメディアの消費者であることを裏付けるイメージがいくつも含まれていた。また「スローフード」運動が唱える伝統的な地域独自の食文化や食を楽しむ価値観の喪失を裏付けるイメージも含まれていた。グループディスカッションでは、こうした個々のイメージを参加者全員で対話（ダイアログ）を通し討論することで、撮影者本人もその他の参加者も全員がメディアとの関わりをさまざまな文脈でクリティカル（分析的に、時に批判的に）振り返ることができたのではないかという印象を得た。

今後の課題

フォーラム当日の質疑応答で主席者からいただいた貴重な質問・意見は、本研究を取り組む上で励みになるものであり、また同時に熟考していかなければならない重要な課題にもなった。

上述の通り、本研究の調査は私が卒業した高等学校で実施し、また参加した高校生8名は私自身の元担任および彼らの現担任である教員を通じ募集したため、サンプリング方法に偏りがあったのではないかと考えた。しかしながら、ST氏からいただいた助言にあったように、私が精通している「ローカル」な環境で若者のさまざまな解釈の仕方を直接理解することで実践的な面でメディア・リテラシー教育の良さが出るといふ指摘は的確であり、実際に、「ローカル」な環境で調査を実施したからこそ気付かなかったことを気付けたのかもしれない。

複数の方々から研究調査の中での私自身の役割を改めて再考するきっかけをいただいた。道具・保護・テキスト主義に陥らないために必要以上に若者・生徒のメディアについての知識と経験を尊重したために、大人・教育者・研究者である私自身が調査の間どのような役割を担えば良いか正直困惑したこともあった。ST氏やTT氏の指摘は、メディア・リテラシーを教えるうえで指導

者または教師はどのような役目を果たせば良いかを再考する機会を与えてくれた（それがたとえ道具・保護・テキスト主義的要素を含むとしても...?）。

最後に、このことは私が兼ねてから感じていることだが、メディア・リテラシーを学校教育というコンテクストで実践しているSK氏とのインフォーマルな会話からは、いかに私が大学といういわゆる象牙の塔に閉じこもり「実践現場」を把握できていないかを改めて気づかされた。教師の資質、実践方法、メディア制作のための学校の設備の普及、あるいはコミュニティーレベルでのメディア・リテラシー実践の推進を強調すると同時に、「実践現場」の現状ももっと理解していかなければならない。

ここで取り上げた方々、その他の方々からの質問・意見・助言にこの場をお借りして改めて感謝させていただきたい。

<参考文献>

- Buckingham, D. (2006). 『メディア・リテラシー教育：学びと現代文化
「Media education: Literacy, learning and
contemporary culture」』. 鈴木みどり（監訳）. 京都：世界思想社.
- de Certeau, M. (1984). *The practice of everyday life*. S. Rendall
(Trans.). Berkley: University of California Press.
- Ito, M. (2008). Mobilizing the imagination in everyday play:
The case of Japanese media mixes. In K. Drotner & S.
Livingstone (Eds.), *The international handbook of children,
media and culture* (pp. 398-412). Los Angeles: Sage.
- Jenkins, H. (2008). *Convergence culture: Where old and new media
collide*. New York: New York University Press
- Morgan, R. (1998). Provocations for a media education in small letters.
In D. Buckingham (Ed.), *Teaching popular culture: Beyond radical
pedagogy* (pp. 107-131). London, UK: University College London
Press.